森岡清美の経歴と研究業績の概観

石原邦雄（元東京都立大学・成城大学）

はじめに

本報告は、本年 1 月 9 日に 98 歳で逝去された森岡清美先生の足跡をたどり、森岡社会学といえる研究業績のアウトラインを紹介して、このセッションの導入としたい。

１．研究者前史

森岡は、1923 年 10 月、三重県の農山村で自作農家の長男として出生。幼少期に生母と死別、その後の家族内葛藤を経て、生家を継がず、勉学で身を立てる道を選ぶ。三重県師範学校卒業後、東京高等師範学校（東京文理大）入学、在学中に学徒兵入隊、敗戦・復員。48 年文理大卒。

２．教育・研究者としての足跡

1950 年東京教育大学助手、52 年講師、54 年助教授、60 年米国研究出張、61 年文学博士取得、65 年国際家族研究セミナー開催、67 年筑波移転問題発生、68 年第 1 回家族社会学セミナー開催、74 年東京教育大教授、77 年文学部長、78 年東京教育大学廃学とともに成城大学教授、84 年成城大学民俗学研究所所長、88 年日本社会学会会長、90 年紫綬褒章受章、92 年日本家族社会学会初代会長、94 年淑徳大学教授、2003 年同大学退任。

３．森岡社会学の展開と業績

農村研究からスタートしたが、専任講師時代の 3 年間に、本願寺教団の同族関係の歴史研究、農村でのキリスト教受容過程、村落構造と氏子組織、そして家族周期の理論と方法に関する 4 論文を発表し、宗教と家族研究にかかわるその後の研究志向と守備範囲が示された。

このうち真宗教団研究が、『真宗教団と「家」制度』として博士論文にまとめられて出版（1962）される。その後の 10 年ほどは周期論を基礎とした家族研究に集中し、73 年の『家族周期論』に結実する。実証研究としては社会保障研究所の生活費調査の実績と、教育大の学生調査実習から始まる勝沼町での 2 世代比較調査が核となる。理論的には核家族理論の応用によって「家」と呼ばれてきた日本の伝統的家族を家族核が世代的に連鎖する直系家族としてとらえることで、欧米型の夫婦家族と異なる拡大家族についても周期的展開の図式でとらえられることを示したことは、海外の研究者からも高く評価された。家族周期論とともに核家族論を彫琢することによって、日本の家族を体系的にとらえる枠組みを築き上げ、家族社会学としての体系を確立していくリーダーシップを担ったといって過言ではない。この間、家族社会学セミナーを継続開催しつつ、多くの研究者仲間と共同によって各種のテキスト作りもなされた。その決定版として望月嵩との共著による『新しい家族社会学』(83) が出版され、これが改定されながら 4 版まで続くことで、日本における体系的な家族社会学の確立を示したといえるのである。91 年に日本家族社会学会が創立され、彼がその初代会長に推されたのも、当然の経過であったと言えよう。

しかも森岡はそこにとどまらず、米国で家族周期論の理論的制約を越えようと登場してきた学際的な研究動向としてのライフコース論をいち早く受け止め、米国の代表的研究者たちとの共同研究を日本側で主導し、若手の研究者も巻き込んで FLC プロジェクトとして展開する。これによって、戦後日本の家族の変化の動向を反映する研究視点の変化、すなわち集団論的観点から個人中心的（あるいはネットワーク的）観点への転換のひとつの足掛かりを付けたということもできるだろう。90 年代に入り森岡は、彼の家族社会学の 3 本目の柱といえる家族変動論をまとめている。ここで森岡は戸田貞三、小山隆の学統を継ぐ、国勢調査を中心とする家族の人口学的分析によって核家族化の進展や家族外生活者の変化を捉えることに成功している。しかし、それ以上に先のライフコース視点に触発されて傾注したのが、彼自身を含む「決死の世代」のライフヒストリーを、その人生行路の同伴者たち（コンボイ）とのかかわりの中でとらえる視点であった。それが、『決死の世代と遺書』(91) と『若き特攻隊員と太平洋戦争』(95) に結実するとともに、後に、92 歳という高齢での最後の作品となる宗教研究、『真宗大谷派の革新運動』(2016) にも見事に生かされたのである。さらにこのライフコース視点は、彼自身の自己探求、人生総括にも向かわせ、その成果が『ある社会学者の自己形成』(2012) として我々に残されたのである。

（キーワード：森岡清美、家族社会学、ライフコース）